

## 甲斐酒折宮「御火焼之老人」考

著者	犬飼 和雄
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	40
号	3・4
ページ	212-233
発行年	1994-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/5761">http://hdl.handle.net/10114/5761</a>

## 甲斐酒折宮「御火焼之老人」考

犬飼 和雄

### 一、御火焼之老人考

『古事記』にしろされている、甲斐酒折宮の御火焼之老人と呼ばれている人物は、大和朝廷による東国遠征軍の最高責任者である倭建命と対等に言葉をかわし、倭建命の問歌に答歌し、その答がよかった、あたっていたからとほめられ、東の国造に任命されている。この国造というのは、大化の改新以前においては、大和朝廷に帰属した地方の豪族、支配者に送られた地方支配の役職名である。

御火焼之老人は『古事記』にしか記録されていないが、問答歌およびそれにまつわる事件については、『日本書紀』にもしるされている。この事件が大和朝廷の歴史にとつて無視できないものであったということがわかるのだが、同時に御火焼老人も無視できない存在であったはずである。老人は甲斐どころか、東、つまり、東国の国造、支配者に任命されているからである。当然のことながら、老人がそうした地位につくことのできる立場にあったと考えるのが当然である。

ここでは、そうした御火焼之老人を、主として表記の面から追求してみたい。なお、御火焼之老人は従来「ミヒタキノオキナ」と呼ばれてきている。

倭建命と御火焼之老人については、『古事記』に次のようにしるされている。

甲斐に出でまして、酒折宮に坐しし時、歌いたまひしく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

とうたひたまひき。ここにその御火焼之老人、御歌に續ぎて歌いしく、

かがなべて 夜には九夜 日には十日を

とうたひき。ここをもちてその老人を誉めて、すなはち東の国造を給ひき。

この引用文の「甲斐に出でまして」以下の主語は、勿論倭建命である。

老人は倭建命の問歌に答歌し、その答があたつていたというので東の国造に任命されるのだが、この老人の答歌が一種の予言になっている点は注目されるのである。「夜には九夜、日には十日」と具体的な数字で正確に答え、それがあたつていたということは、老人に予言者、呪術者の性格を読むことができるのである。

こうした御火焼之老人の性格なり立場なりを頭に入れて、この老人が従来どのように理解され、説明されているかとなると、なんと奇妙な説明が多くて理解に苦しむのだが、どうやらその最大の原因は、この問題が従来ともに取りあげられなかったからではないかと思われる。

具体的に御火焼之老人がどのように説明されてきているのか、例をあげて見てみよう。

『日本古典文学大系・古事記』（岩波書店）では、次のように説明されている。

夜のともしびのために火をたく役の老人。

書紀には秉燭者とある。

秉燭者とは、『日本書紀』では御火焼之老人が消え、そのかわりに登場する人物で、普通「ヒトモスモノ」と読まれている。

この説明でわかることは、老人が火をたくただの老人で、『日本書紀』の秉燭者と同一人物だとしていることである。つまり、先に述べた老人の性格や立場が全く無視されているばかりか、老人という言葉すらあってもなくてもいいように説明されている。当然のことながら、どうして『日本書紀』で『古事記』の「御火焼」を「秉燭」に、「老人」を「者」に変えたかなどは全く疑問にもされていない。

御火焼之老人がただの老人にすぎないという説明が、もつとも極端な形で説明されたものが次の説明である。

『新潮古典集成・古事記』では次のように説明されている。

夜警の篝火を焚き守る老人。当時、賤民の仕事。

この説明では、ただの老人どころか賤民の老人にまでされている。この説明が全く説明になっていないのは、当時という時代を表わす言葉である。倭建命の東国遠征がいつであつたのか限定できないので、当時という時代的表記は意味をなさないのである。またかりに『古事記』『日本書紀』の年代を信じたとしても、その当時、東国のいわゆる荒ぶる神々や賊の世界に賤民が存在していたかどうかは、『記紀』に全くしるされていないので、賤民の仕事であつたという説明はなんの根拠もないのである。

それに、ただの老人どころか、賤民の老人が大和朝廷の遠征軍の最高責任者、倭建命と対等に問答歌をかわし、その結果、東の支配者になるなど到底ありうべきことではないのである。古代における支配体制は一族支配であり、賤民の老人が支配者になりえないのは、言うまでもないことである。その意味では、この老人は学問的にひどく遇な

状態におかれて現在にいたっているといえよう。

こうした状態は、次の説明を見ると、もつと明白になる。

『古典文学全集・古事記』（筑摩書店）には、次のような説明がしるされている。  
ここに一老翁あり。衛士の焚くなる籜を焚く。

この説明の衛士なる言葉を見ると、どうして倭建命と甲斐酒折宮の御火烧老人の歴史に、衛士が登場できるのか、全く理解できなくなる。

衛士というのは、大和朝廷が律令を作った結果生まれた役職で、律令ができたのは七世紀になってである。それに衛士というのは、大和朝廷の宮殿を警護する地方出身の兵士である。御火烧之老人や倭建命の存在は、それよりずっと昔であるし、それよりなにより、この事件は甲斐の酒折で起こっているのである。甲斐の酒折は、大和朝廷が征服しなければならなかった賊の国であり、そこに衛士がいるはずがないというより、衛士という概念すら存在しない場所なのである。当然のことながら、この説明が御火烧之老人の説明になっていないことはいうまでもない。

もう一つ例をあげてみよう。

『日本古典文学全集・古事記』（小学館）では、次のように説明している。

夜警のためにかがり火をたく老人。景行紀には「秉燭者」とある。

この説明も、老人が夜警のかがり火をたくような身分の低いただの老人で、しかも『日本書紀』の秉燭者という人物と同一人物だとしていることは今更あらためて説明することはないであろう。

以上の御火烧之老人についての説明は、日本の代表的な古典叢書における説明であり、従来御火烧之老人についての理解はこの程度のものであったと考えてよいだろう。

以上の御火焼之老人についての説明をまとめると次の三つにまとめることができる。

一つは、御火焼の老人が身分の低いただの老人であるということである。更にいえば、この点に関して、なんの疑問も提出されていないということである。

二つは、『日本書紀』の秉燭者と同一人物だと考えており、老人という言葉が『日本書紀』で消されてしまっているというのに、何も問題にされていないということである。この件に関しては、秉燭者の説明でも同じことが起こっている。『日本古典文学大系・日本書紀・上』では、秉燭者の説明を見ると、「記には『御火焼之老人』とある」となっており、やはり同じ立場で秉燭者を理解しているのがわかる。

三つは、御火焼をいずれもかがり火にとっていることである。この火が本当にかがり火かどうかは全く問題にされていない。当然のことながら、この「火焼」、つまりかがり火に「御」という敬語がつけられているのに、この「御」については全く問題にされていないのである。

この三つの点を見ただけでも、御火焼之老人が現在までどのように扱われてきたか、というよりは、ともに考え論議されることがなかったということが明白にわかるであろう。

## 二、景行天皇記

倭建命と御火焼之老人が問答歌をかわすのは『古事記』の景行天皇記においてであり、『日本書紀』では日本武尊と秉燭者が問答歌をかわすことになっている。両者の問答歌は同じだが、その記述は大きく異なっている。『日本書紀』の記述は次のようになっている。

日高見国より還りて、西南、常陸を歴て、甲斐国に至りて、酒折宮に居します。時に挙燭して進食す。この夜、歌を以て侍者に問いて曰はく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

諸の侍者、之答え言さず。時に秉燭者有り。王の歌の末に続けて、歌して曰さく

日日並べて 夜には九夜 日には十日を

即ち秉燭人の聡を美めたまいて、敦く賞す。即ち是の宮に居しまして、鞍部を以て大伴連の遠祖武日に賜う。

この『日本書紀』の記述が、『古事記』の記述と根本的に違うのは、『古事記』の御火焼之老人という言葉が消えているということと、東の国造に任命したという言葉が『日本書紀』では消えているということである。更に言えば、日本武尊と問答歌をかわした人物の性格がひどく曖昧にされているということである。その原因は御火焼之老人という表記にあると思われるが、その前に『古事記』と『日本書紀』の表記の違いを考えなければならないと思う。

実は景行天皇における記述の違いは、甲斐酒折宮における問答歌だけではなく、もっと大きな違いが存在しているのである。というよりは『古事記』になくて『日本書紀』にだけ存在している記述がある。それは景行天皇による九州遠征の記録である。

この景行天皇による九州遠征に関しては、従来よく問題にされている。例えば津田左右吉はこれは大和朝廷の歴史ではなく、『日本書紀』を作るにあたって造作された架空の話であるとしている。しかし、架空であろうとなかろうと、こうした記録が書かれたのには、それなりの理由があるはずで、架空のものだからといって無視できないものがあるのも事実である。

この景行天皇の九州遠征に関して、古田武彦がその『盗まれた神話』の中で画期的な新説を提供している。その論

証は綿密で強い説得力を持っている。

古田武彦は、まず第一に、この記録が『日本書紀』にだけあって『古事記』にないことを問題にして取りあげている。景行天皇の九州遠征は輝やかしい勝利の記録であり、もしこれが大和朝廷の歴史なら『古事記』に書かれなかったことはないはずだと言うのである。この前提に立ち、景行天皇の九州遠征に多くの地名がでてくると、しかもその地名が、筑紫が空白になっていることに着眼して、次のように結論している。

これは九州王朝の九州征服の歴史を、大和朝廷が大和朝廷の九州征服の歴史に盗用したものであると言うのである。なお九州王朝については、古田武彦が『失なわれた九州王朝』で綿密な論証をおこなっているので、参考にされたい。ここで古田武彦は次のように述べている。わたしは『書紀』の謎を解きはなつための重要な武器を手に入れたようである。『書紀』にだけあって、『古事記』にない説話——そのような説話に対しては、原則として『重大な疑い』が向けられねばならぬ。

このように『古事記』と『日本書紀』の記録の違いに着眼して、『古事記』や『日本書紀』から日本の古代史に迫るのは一つの理解であることはまちがいない。

なお『日本書紀』が九州王朝の歴史を盗用したという見解は、次章で述べる中国史書からの『日本書紀』における盗用の姿勢を見ると更に肯定できるのである。

ところで、この景行天皇の九州遠征の記録でもう一つわかることは、殊に『日本書紀』では、天皇家の大和朝廷の絶体的な存在を強調している点である。別の見方をすれば、大和朝廷と対等の立場にある王朝や国家を一切認めていないということである。『古事記』にはない景行天皇の九州遠征の記述を『日本書紀』に記録したのは、九州がすでに大和朝廷の支配下にあったという主張で、そのもつとも端的な証拠である。この立場を更に延長して考えれば『日



本書紀』は『古事記』で書かれた内容で、大和朝廷にとって好ましくないとと思われる点、つまり大和朝廷以外の王朝の存在をうかがわせるものを変えていったとも考えられるのである。

この視点に立つて見ると、甲斐酒折宮における問答歌の記述の違いは、やはり同じ意図によるものと考えられるのである。ここではこの問題を表記の点から、つまり、漢字表記の点から追求してみたいと考えているが、その前に、先にも述べたように中国の史書と『古事記』や『日本書紀』の表記の関係を、景行天皇記だけにしぼって明らかにしてみたい。

### 三、景行天皇と中国古典

『古事記』も『日本書紀』も中国古典の影響を驚くほど受けているというより、中国古典をいい意味でも悪い意味でも驚くほど利用しており、両書の作成には中国人が参加していたのではないかと思われるほどである。少くとも、両書を作成した学者は、中国語を自由に読みこなし、それを日本語に自由で利用できた人物であることはまちがいない。当然のことながらそのような学者が大和朝廷に大勢いたとは考えられない。またそうした学者達が、全くなんの関係もなく、大和朝廷の都に存在していたとは考えられない。『弘任私記』序に『古事記』を記述した太安万侶が『日本書紀』の作成に参加したとするされているが、なんらかの形で、太安万侶が『日本書紀』の作成に関係を持っていたと考える方が、はるかに常識的であろう。当時の朝廷に仕えた学者達の世界は、今考えるよりはるかに狭い特殊な世界だったはずだからである。

いずれにしても、『古事記』殊に『日本書紀』を作成した学者達は十二分に中国古典を利用していたのは事実であ

る。『日本書紀』は中国古典の『史記』『漢書』『後漢書』『三国史』『梁書』『隋書』『芸文類聚』『文選』『金光明最勝王經』などが利用されている。『古事記』も程度の差はあれ、こうした古典を利用していたことはまちがいない。

『日本書紀』の景行天皇紀は、その中でも特に中国古典の影響が強いと考えられる。津田左右吉は、景行天皇の九州遠征は架空の話だとして、その理由をいくつかあげているが、その一つに、「中国思想に基づく修辭が認められる」からだとしているが、それほど景行天皇紀は中国古典の影響が大きいのである。別の言い方をすれば、景行天皇紀は中国古典の理解、漢字の理解なしには理解できないのである。その例をいくつかあげてみよう。

景行天皇の景行もそうである。日本語としてはそれほどなじみのない景行は本来「偉大な道とか立派な行為」という意味で、そうした行為、行動をした天皇だとして景行天皇としたことはまちがいない。この言葉は中国古典に多く用いられている言葉で、次のように使われている。

高山仰止、景行行止（『詩経』）

景行行矣（『史記』孔子世家）

以二月奉<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>資、勉率景行（『後漢書』）

『古事記』における倭建命の「倭」もそうである。中国古典の倭国の「倭」を利用したのは言うまでもない。中国古典の「倭」は勿論「ヤマト」とは発音されない。その「倭」を「ヤマト」と読ませたのは、中国古典に出現する倭国を天皇家の近畿大和朝廷と同一のものにする意図からである。古代史最大の英雄にこの字を使った効果は大きかったはずである。更に言うまでもなく、中国古典における倭国は三世紀以前の存在であるから、そのまま読むと、大和朝廷も倭建命も三世紀以前に実在したことになる。近畿の大和朝廷が三世紀以前から日本の支配者だったことはあり得ない。『日本書紀』が倭建命を日本武尊と「倭」を「日本」に変えたのも、その一つの証拠だと考えられる。なお

『万葉集』の冒頭に「ヤマト」を「山跡」「山常」「八間跡」などと表記しているが、これが前記のような意図のない本来的な表記だったはずである。先にあげた秉燭者も同じである。この言葉は「ヒトモスモノ」と訓読されていると述べたが、実際現在までそう読まれている。しかしこの言葉がその後日本語として通用しなかったのを見てもわかるのだが、この訓読はおかしいのである。「秉」は持つとか手に取るという意味である。「燭」はいうまでもなく、ともしびとかあかりという意味である。したがって、中国古典の用法は次のように、本来の意味で使われており、『日本書紀』においても同じ意味で使われたのはまちがいない。

書短而夜長 何不秉燭遊（樂府・西門行）

書短苦夜長 何秉燭遊（古詩十九首）

秉燭夜遊（李白・春夜宴桃李園序）

いずれも秉燭は、あかりを手にして夜を遊ぶという意味で、火焼之老人の火焼、つまり火をつけるとか火を焚くとは本質的に意味がちがうのである。秉燭者を訓読すれば「アカリヲモツモノ」でなければならぬはずである。『日本書紀』の作成者は火に関係があるので、御火焼之老人を秉燭者でその意味をぼかしてしまっただが、当然ながら秉燭者を東の国造にすることができなかつたので、ほめるといふ言葉でごまかしたのである。またそれが、天皇家以外には権力者、支配者は存在しなかつたという『日本書紀』作成の意図にも合致していたのである。この事実は逆に言えば御火焼之老人という表記に天皇に相当する支配者という意味が含まれていたと考えられるのである。

御火焼之老人が存在した東国についての『日本書紀』の記述は、言葉だけではなくて、中国古典の記述がそのまま利用されているというより盗用されているのである。次の文章は、東国についての『日本書紀』の記述である。

武内宿禰、東国より還て奏して申さく、「東の夷の中に、日高見国有り。其の国の人、男女並に椎結かみむすけ身を文もじけ

て、為人勇み悍し。是れすべて蝦夷と曰う。亦土地壞えて眩し。撃ちて取りつべし。

この『日本書紀』の文と次の中国古典の文を比較して読むと、景行天皇の時代、大和朝廷が東国とどのような関係にあったのかわかるし、同時に『日本書紀』と中国古典の関係が明白になるのである。

南夷君長……此皆椎結（『漢書』西南夷伝）

東方曰夷被髮文身、有<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>火食<sub>一</sub>者<sub>上</sub>矣（『礼記』王制）

なおここで言う西南夷、東方の夷というのは古代の越人をさしているが、『日本書紀』が日本の東国の蝦夷を説明するのに、中国古典の記述をそのまま使っているのである。その理由は、景行天皇の時代が、『漢書』や『礼記』の時代に近かったからであろう。もっとも、中国古典の夷の記録を盗用する理由が別にあつたかもしれないが、それはまた別の問題である。

更にもう一つ、東国について『日本書紀』は次のように記述している。

蝦夷は是<sub>はなは</sub>尤だ強し。男女交り居りて、父子<sub>わきだぬ</sub>別無し。冬は穴に宿、夏は櫟<sub>す</sub>に住む。毛を衣き血を飲みて、昆弟<sub>このかみ</sub>相疑う。山に登ること飛ぶ禽<sub>とり</sub>の如く、草を走しること走<sub>に</sub>ぐる獸の如し。

この記述だけ読むと、大和朝廷が東国人についてかなり具体的に理解していたと思われるが、次の中国古典の記述を見ると、実はその逆で、大和朝廷が東国および東国人についてほとんどなんの知識も有していなかったことがわかるのである。

昔者先王、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>宮室<sub>一</sub>。冬則居<sub>二</sub>宮窟<sub>一</sub>、夏則居<sub>二</sub>櫟巢<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>火花<sub>一</sub>。食<sub>二</sub>草木之実<sub>一</sub>、鳥獸之肉、飲<sub>二</sub>其血<sub>一</sub>、茹<sub>二</sub>其毛<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>麻糸<sub>一</sub>。衣<sub>二</sub>其羽毛<sub>一</sub>。（『礼記』礼運）

このように中国古典を『日本書紀』が利用していることは、津田左右吉のように、だから景行天皇の九州遠征は架

空物語だと言うこともできるが、別の言い方をすれば、『日本書紀』の記述を理解するためには、勿論『古事記』も同じだが、中国古典の理解なしには不可能だと言うことができる。同時に、景行天皇の時代、といっても、正確に何時かとは限定できないが、大和朝廷は東国についてなんの知識も持っていなかったということがわかるのである。つまり、東国は独立した地域で、そこに大和朝廷に匹敵する王朝が存在していたともいえるのである。次の『古事記』と『日本書紀』の東国遠征に関する記述は、間接的にそうした歴史を伝えているのである。

ここに天皇、また頻しきて倭建命に詔りたまひしく、「東の方十二道の荒ぶる神、また伏はぬ人等を言向け和平やせ。」  
〔古事記〕

なお荒ぶる神と神が単数でこのように記されているのは、暗に東国における支配者をさしているともとれるのである。

『日本書紀』では次のようになってゐる。

是に、日本武尊、雄詔して曰したまはく、  
「熊襲既に平ぎて、未だ幾いくばくの年も経ずして、今更東の夷叛ひなけり。何の日にか大平たいへいぐるに逮いたらむ。臣、勞いたはしと雖も、  
頓ひたふに其の乱を平けむ」ともうしたまふ。

この『日本書紀』の記録と『古事記』の記録を比較してもっとも注目されるのは、『日本書紀』では東の夷叛けりと、従来大和朝廷に帰属していた東国の夷が反乱を起こしたようにしるされている点である。ここに『古事記』と『日本書紀』の根本的な違いがある。

いづれにしても、中国古典の影響は殊に『日本書紀』では大きく、個々の言葉の表記にもその影響はいたるところに見受けられる。

例えば「乃ち車駕止みぬ」と景行天皇の行幸の中止を表記している。この車駕という言葉も中国古典を知らなければ理解できない言葉である。車駕については『漢書』高帝紀の顔師古注の次の文によるものである。「凡言車駕者、謂天子乘車而行」

また「急に撃ちたまえ。な失ひたまいそ」と訓読されている記述の原文は「急撃之。勿失」で、これを『漢書』の「急撃之。勿失」と比較すれば、中国古典の表記をいかに利用しているかがひと目でわかるであろう。もう一つ例をあげると「三尺剣を提げて、熊襲を撃つ」の三尺は、次の『漢書』の一文を知らなければ、というより、いかに中国古典を利用しているかがわかる。「吾以布衣、提三尺取天下」ここにおける三尺というのは剣のことで、『日本書紀』は三尺だけではわからないと思つて三尺をみじかきと読み剣をそえたのである。

以上のように、『古事記』『日本書紀』は中国古典の知識を工夫しながら利用して作られたものであり、したがって、両書における表記を、ここでは「御火焼之老人」という表記を問題にする時も、中国古典についての知識なくしては理解できないのである。

#### 四、老人考

『古事記』の御火焼之老人を『日本書紀』が乗燭者に変えたのは、当然変えなければならぬ意味があつたからである。両者が同一の意味なら変える必要はなかつたはずである。今ここでは「老人」に焦点をあてて、果してこれがただの年寄り、あるいは賤民の年寄りという意味以外にはとれないのかどうか追求してみることにする。先にも述べたように、そうした年寄りなら、東国の支配を大和朝廷によってゆだねられることはなかつたはずだからである。

現代の中国語でも、「老」は日本人の語感と全く違った意味でよく使われている。よく固有名詞の前につけられ「老陳」のように使われる。この場合の「老」は「さん」という敬語で、年を取っているという意味は全く存在していない。また「老師」というと、日本語の「老師」とは全く異なつて「先生」という意味であつて、年寄であるかどうかは関係がないのである。つまり「老」は敬語として使われることが多いのである。これと同じような用法は、日本でも江戸時代に多く見られる。

江戸幕府の役職名である「大老」「老中」「老女」などがそれで、面白いのは「若年寄」という言葉まで使われている。これは「老」が日本語で「年寄」なので、「年寄」まで中国語的に使われた例である。江戸時代にどうしてこうした中国的語法の「老」が使われたかといえ、江戸時代に中国古典がさかんに読まれていたからである。同じように中国古典を駆使して『古事記』や『日本書紀』を作成した八世紀の学者たちは、「老」という文字を同じように理解し使つたと考えても少しもおかしくないとと思われる。

勿論「老」には年をとるという意味もあるが、次のような用法も存在している。

一、臣の長・④天子の上公・属<sub>二</sub>於天子之老<sub>一</sub>二人。注、老、謂<sub>二</sub>上公<sub>一</sub>也。（『礼記』）

④天子の大夫の総称。長者の尊称

二、老子の略。老子という人物。

この老子というのは、孔子と並び称せられる中国古代の思想家で道家の祖といわれる人物だが、孔子と老子の名前は本質的に異なっている。孔子の孔は姓であり、子はすぐれた人物という尊称であり、孔子とは、孔という姓のすぐれた人物という意味である。それに対しての老子の老は姓ではないのである。『史記』には、次のように説明されている。

老子、名は耳、字は聃<sup>たん</sup>、姓は李氏といい、周王室の書庫の記録官。

したがって孔子と同じ呼び方をするなら、老子でなければならぬのである。つまり、老子というのは、老も子も尊称で、えらい人、りっぱな人物という意味なのである。なお、人についていうと、人もすぐれた人物という用法があり、老子と老人は同じ意味に使われてもおかしくないのである。老子と老人が文字の意味からだけで同種のものであるという言い方は唐突かもしれないが、『史記』の老子にかかわる次の説明を見ると、そこに『古事記』の予言者の老人との関連がうかがえるし、勿論『古事記』を記録した太安万侶がこの『史記』の記述を十分知っていたと考えられるから、『史記』の老子と『古事記』の老人の関係を読みとつてもあながち唐突ではないような気がする。なお次の『史記』の記述は、中国における図讖<sup>とくしん</sup>についての最初の記録だとされている。

図讖とは、王者の運命や人事の未来を隠語の形で、つまり、間接的な何かの象徴によって予言したものである。

秦の獻公に謁した周の太子儋は「秦は初め周と合い、合い離れて五百歳にして復た合うべし。合いて七十年にして霸王出でん」

この予言は的中し、秦の昭王が周を亡ぼして七十年後に、始皇帝が霸業を達成しているのである。なお、この図讖、予言をしたのは周の太子儋であるが、この儋について、『史記』では次のような説明を加えている。

或曰儋即老子、或曰非也、世莫<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>其然否<sup>一</sup>。この補足説明をどうとるかにはむずかしいところだが、少くとも老子という人物が予言能力を持っていたと理解しても不自然ではないように思われる。なお興味深かったのは原百代著『武則天』(三)に次のような文章があったことである。

図讖<sup>とくしん</sup>とは、既述のように、王者の運命をはじめ、人事の未来を、多くは特別な隠語を用いて予言、または予知する方法である。図讖の最も古いものは、「史記老人伝」に載っており、しばしば予言が的中したことから、後の帝王



や、また天下を纂奪して……

興味深いのは「史記老人伝」という言い方である。おそらくこれは著者の誤記である。僂の図讖についての話は、正確には『史記』の卷六十三、老莊申韓列伝第三に書かれており、もし簡略化してこの章を言えば「老子伝」でなければならぬはずである。しかし「老子」も「老人」も同じ種類の尊称であり、この著者が誤記してもうなずけるころがあり、かえって興味をそえられるのである。

ところで、この老子、つまり僂の予言は、数字を使つての予言である。『古事記』の老人の予言も数字を使つたものであつた。太安万侶が『史記』の記録を利用していたと考えてもおかしくないように思われるのである。

いづれにしても、老子が尊称であるように、同じような予言能力を持った老人が尊称として使われていると見てもかならずしも矛盾はないと思われる。しかも『古事記』における「老」が尊称の中でも、長者の尊称と考えられるのである。ここである長者とは氏族の長のことである。古代の日本において、支配者が予言能力を持っていた、いや、それが支配者の条件だったことは、『三国志』の魏志倭人伝の中の卑弥呼についての次の記述を見ればわかるのである。

名づけて卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。

ここである鬼道は呪術、予言のことで、衆を惑すという表現は中国側の視点によるものであることはいうまでもない。中国の鬼道である図讖は、最初は尊重されたが、やがて邪道、衆を惑わすものとして禁止された。そうした中国側の変化が、卑弥呼の鬼道を衆を惑わすものと言わしめたものかもしれないが、いづれにしても、古代において、支配者が予言的能力を持っていると考えられていたのも一つの事実である。勿論同時に族長であつたことはいうまでもない。

以上述べたように「老人」は尊称と見ておかしくはないし、そう見ることによって、はじめて、『古事記』の「老人」が東の国造となり、東国の支配をまかされた根拠が明確になるのである。『日本書紀』は秉燭者と曖昧な言葉に変え、ただ秉燭者をほめたと言いたが、それではわざわざ『日本書紀』に東国の歴史として記録する必然性が存在しないのである。さすがに『日本書紀』は、結びに「ゆげひのものを鞍部を以て大伴連の遠祖武日に賜う」としたが、秉燭人との結びが結びつかないことは言うまでもない。秉燭人が「老人」でそれが長者に対する尊称でなければ、記録の歴史の必然性は存在しないのである。

「老人」という表記が尊称であり、しかもこれが長者、つまり、族長の尊称であるということは、『古事記』における別のところにおける「老人」の表記ではつきりと確認できるのである。顯宗天皇記に次のような記述がある。

初め天皇、難に逢いて逃げたまひし時、その御糧を奪いし猪甘の老人を求めたまひき。こを求め得て、喚上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆その族の膝の筋を断ちたまひき。ここをもちて今に至るまで、その子孫、倭に上る日は、必ず自らあしなえ跛くなり。

顯宗天皇は皇位につく直前、当時袁祁命と称していたが、平群臣の祖志毘臣と争い、これを殺している。難に逢いてはそのことを指しているとも考えられるが、いずれにしてもこの記述は、ただの老人に食糧を奪われたから皇位についた後で、その老人を捕えて斬殺したとは考えられないのである。ここでは、次の説明「皆その族の膝の筋を断ちたまひき」がそれを証明している。「老人」は斬殺され、一族が罰せられたということは、この「老人」が族長だったことを明らかにするものである。なおこの「老人」を「御火焼之老人と同じように『日本書紀』では抹殺されている。

『古事記』には「老人」という表記は御火焼之老人とここの猪甘の老人の二回だけであり、どちらも一族の長とい

う意味に使われていると考える方が筋が通るし、事実その意味で使われていたと思われる。なお『古事記』では、「オキナ」の表記がもう一か所だけある。それは須佐之男命が八俣の大蛇を退治するところで、「老夫と老女おきな おみなと二人ありて」というように「老夫」としるされている。この「老夫」も「老」は敬称に用いられていると考えられる。この「老夫」が国つ神で、大山津見神の子だからである。

以上述べたように「老人」が尊称、長者の尊称であれば、その上についている「御火焼之」という形容詞も、単にかがり火の火をつけるというような、何の意味もない形容詞ではなく、尊称にふさわしい肩書であると考えの方が筋が通るのである。というよりは、それ以外には考えられないのである。

## 五、御火焼考

「火焼」は「ヒタキ」と読まれているが、この言葉が火を燃やす、火を焚くという意味であることは問題がない。問題なのは、その火がどんな火であるか、何を燃やすのかということである。従来はかがり火、ともしびを焚くと解釈され、この解釈が定説になっている。しかしこの解釈では、老人が一族の長、言いかえれば、支配者だと解釈した場合、まったく意味が通らなくなってしまう。かがり火とした場合は、ただの年寄と解釈するより他はないのである。しかも、かがり火とした時、そのかがり火に敬語の「御」がどうしてつけられたのか全く説明がつかない。かつてこの「御」は火についた言葉で、たんなるかがり火ではなく、聖なる火、神殿と関係を持った火ではないかと解釈したが、倭建命にも、御火焼之老人にも、神殿の火とかかわっているような記述がどこにもないので、もう一つ納得できなかった。またこの「御火焼」をこのような視点からとらえている文献も見ることがなかった。しかしこの問題を解

く鍵は、当然「御火焼」の三文字と、それにまつわる倭建命の東征の中にあると考えるのがもっとも自然である。

ここまでくると、この場合「焼」という字にその鍵があるのに気がついたのである。焼という文字は、かがり火と  
いうような意味はなく、したがって従来「火焼」の中にかがり火を求めたこと自体無理だったのである。「焼」には  
かがり火ではなくて「野火」という意味があるのである。したがって「火焼」を中国語風に「火焼」と読めば、野火  
を焚く、野火を燃やすという意味になり、文字として意味が存在しないかがり火を持ちこむような無理をしないです  
むどころか、倭建命と密接な関係がある言葉だということがわかつてくる。それが次の文である。

故ここに相武国に到りましし時、その国造詐りて白ししく、「この野の中に大沼あり。この沼の中に住める神、  
甚道速振る神なり。」とまをしき。ここにその神を看行はしに、その野に入りましき。ここにその国造火をその野  
に著けき。……向火を著けて焼き退けて、還り出でて皆その国造等を切り滅して…

つまり、倭建命は東国の国造、支配者によって野火攻めにあつてゐるということである。言いかえれば、東国の支  
配者は、野火を使つて倭建命と戦つたのである。しかし、『古事記』のこの文章だけでは、「焼」が野火の意味に使わ  
れてゐるとは言えないが、『日本書紀』の同じ場面をえがいた部分を見ると、この問題がある程度明確になつてくる。  
『日本書紀』では、次のようにえがいてゐる。

是歳、日本武尊、初めて駿河に至る。其の処の賊、陽り従ひて、欺きて曰さく、「この野に、麋鹿甚だ多し。気は  
朝霧の如く、足は茂林の如し。臨して狩りたまえ」とまうす。日本武尊、其の言を信じたまひて、野の中に入りて  
覓獣したまう。王を殺さんという情有りて、その野に放火焼。……則ち悉にその賊衆を焚きて滅しつ。

この記述は『古事記』の内容とは異なるが、日本武尊が東国の賊、つまり支配者から野火で攻撃されたのは同じで  
ある。しかも、その野火攻めを、「放火焼」と表記しているところが注目されるのである。この場合「焼を放火する」

つまり「野火を放つ」と読めるのである。当然「火烧之」というと、野火を放つ、野火をつけたという意味になる。しかし『古事記』『日本書紀』とも、野火で戦った東国の支配者、国造や賊は、焚き殺されている。それなら、「火烧之老人」つまり「野火を放った老人」はこの戦いで、倭建命とどんな関係にあったのであろうか。少くとも野火攻めと老人はなんらかの関係にあったことは事実である。そのなんらかの関係を示すものが、残された「御」であると考えるのは当然だし、それ以外に考えられないのも事実である。とすれば、「御」は敬称とすることはできなくなる。「御」が敬称とれないとすると、あとは「御」を動詞とする他なくなるのである。敵のつけた野火に敬称などつけられないからである。

「御」は動詞で、あやつるとかもちいるとかいう意味がある。したがって、「御火烧」は野火をあやつったという意味にとれるのである。そうとれば「御火烧之老人」は野火をあやつって倭建命と戦った、東国の長者、つまり支配者という意味になる。倭建命と直接戦った国造や賊は殺されたが、そういった人間を背後で指揮していた支配者の姿が浮んでくるのである。それは倭建命と天皇との関係、つまり、東国の天皇に相当する人物だったと言うことができるのである。

## 六、結び

このように「御火烧之老人」が倭建命、つまり大和朝廷の遠征軍と野火を利用して戦った東国の王であると理解すると、『古事記』『日本書紀』が大和朝廷の歴史にとつて無視できなかった事件として記録した根拠も理解できるし、『古事記』の「御火烧之老人」をそのままにすると、天皇家の大和朝廷以外に王国、つまり、国王の存在していたこ

とが記録に残ってしまうので、『日本書紀』では、だから「秉燭者」に変えたのだということがわかるのである。なお『日本書紀』ではこの問答歌事件の結末として「ゆげいのとものを鞞部を以て大伴連の遠祖武日に賜う」と大和朝廷に帰属した部族の誕生を述べているが、これも「秉燭者」が「御火焼之老人」であることによつて、初めて納得できるのである。また、「老人」が倭建命と対等に問答歌をかわしたり、東の国造、つまり東国の支配をゆだねられたことも、今まで述べてきた「御火焼之老人」の実像を解明したことで明らかになるのである。

したがつて東国に、東国を支配した王が存在し、王朝が存在し、それが甲斐の酒折の宮を中心とした地域だったと「御火焼之老人」という表記から推論されるのである。

## 参考文献

- |       |          |      |
|-------|----------|------|
| 古事記   | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 古事記   | 日本古典文学全集 | 小学館  |
| 古事記   | 新潮古典集成   | 新潮社  |
| 古事記   | 古典文学全集   | 筑摩書房 |
| 古事記   |          | 岩波文庫 |
| 日本書紀上 | 日本古典文学大系 | 岩波書店 |
| 史記    |          | 上海書店 |
| 漢書    |          | 上海書店 |

後漢書

上海書店

三国志

上海書店

魏志倭人伝

岩波文庫

失なわれた九州王朝

古田武彦

角川文庫

津田左右吉全集第一卷

岩波書店

武則天

原百代

毎日新聞社

大漢和辞典

大修館書店

辞源

商務印書館

新字源

角川書店